

ジョージ・ハーバートとフランシス・ベイコン

——アタランタの玉をめぐる寓意的解釈——

山根 正弘

はじめに

筆者はかつて、17世紀イギリスの宗教詩人ジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) が形而上詩人ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) より受けた数多くの影響のうち、ギリシア神話のひとつアタランタの競走を扱ったことがある¹⁾。女傑アタランタが求婚者と競走して、彼女が勝てば相手の首を刎ね、男が勝てば妻として娶るとというのが条件。アタランタは俊足で名高く、相手は策を弄する。走路に黄金の林檎を投げ、アタランタが心を奪われている隙にゴールする。ジョン・ダンがエレジー形式で記した恋愛詩「床に就く恋人に」(“To his Mistris Going to Bed”)では、身にまとった衣装を次々に脱ぐ貴婦人の裸体ではなく、脱ぎ捨てられた高価な装飾品に目を奪われる男の愚かさが、「アタランタの玉」の隠喩で表現される。一方、ハーバートの宗教詩「滑車」(“The Pulley”)では、パンドラ神話の枠組みを利用しながら、被造物である自然の美しさに魅せられ、創造主たる神の存在を忘れる人間の愚かさが揶揄される。ダンの恋愛詩を基にハーバートの宗教詩を重ねて読むと、大筋を忘れ目先の利益を追求するアタランタの寓意が、まるで透かしのように浮かび上がる。

今回取り上げるのは、ハーバートと同じケンブリッジ大学トリニティ学寮出身のフランシス・ベイコン (Francis Bacon, 1561-1626) である。政治家・哲学者のベイコンは『古代人の英知について』(*De sapientia veterum*, 1609) [以下『古代人の英

知]]において、アタランタの寓話を分析し思想の一端を開陳するだけでなく、主要となる著作でこの寓意を何度か援用している。ベイコンとハーバートの年の差は32歳、社会的な地位や立場、そして著作の質や量からしても、ベイコンがハーバートに示唆を与えた可能性が高いが、これまでアタランタの寓意に関して両者の関連は指摘されたことがない²⁾。したがって、アタランタの寓意を中心にして、ダンの恋愛詩を間にはさみ、ハーバートがベイコンから受けた影響、またその範囲や質について解明を試みるのが本稿の目的である。

I ベイコンによるハーバート礼讃

『釣魚大全』(*The Compleat Angler*, 1653, 1676)で知られるアイザック・ウォルトン(Izaak Walton, 1593-1683)による伝記集は、虚実入り混じった聖人伝の様相を帯びた創作であると指摘されることしばしばであるが、その危険性を承知したうえで、『ジョージ・ハーバート氏の生涯』からベイコンとの邂逅を引用しよう³⁾。ハーバートがケンブリッジ大学の代表弁士(Public Orator)、王侯貴族など大学に訪れるすべての賓客に宛て書簡や祝辞をラテン語で作成する、あるいは自身で式辞を述べる役を務めていたときのことである。

The following year, the King appointed to end His progress at *Cambridge*, and to stay there certain days; at which time, he was attended by the great Secretary of Nature, and all Learning, Sir *Francis Bacon* (Lord *Verulam*) and by the ever memorable and learned Dr. *Andrews* Bishop of *Winchester*, both which did at that time begin a desired friendship with our *Orator*. Upon whom, the first put such a value on his judgment, that he usually desir'd his approbation, before he would expose any of his Books to be printed, and thought him so worthy of his friendship, that having translated many of the Prophet *Davids* Psalms into English Verse, he made *George Herbert* his

Patron, by a public dedication of them to him, as the best Judge of *Divine Poetry*.

(翌年、国王ジェイムズが行幸をケンブリッジで止め、そこでしばらく滞在すようにお命じになった。そのとき王は、自然とすべての学問に仕える大臣サー・フランシス・ベイコン[ヴェルラム卿]と、常に思い起こすべき博学多識のウィンチェスター主教アンドルーズ博士を連れていた。その折、ふたりと代表弁士との望み求められる友好関係が始まった。代表弁士の判断を、ふたりのうち前者が高く評価した。自分の著書を印刷して公刊しようとするまえに、代表弁士の承認を求めるほどであった。また友情をととても大切に思った。預言者ダヴィデの詩篇の多くを英語の韻文に訳したとき、宗教詩を最も正しく鑑賞できる者としてジョージ・ハーバートに訳詩を献呈し、自分の後援者としたほどであった。)⁴⁾

ウォルトンは創作の材源を、通常、マニユスクリプトなどの作品や書簡それと関係者による証言に求めたが、上記引用の場合も、ハーバートが代表弁士のときベイコンに宛てたラテン語の詩歌や書簡および訳書に付したベイコン自身による献呈の辞である。1620年のこと、ベイコンが母校ケンブリッジ大学に自著『大革新』(*Instauratio magna*)の写しを寄贈した。ハーバートは代表弁士として、その謝意をラテン語で表した。ハーバートの現存するラテン語の書簡詩の中でも一番有名な詩で、ベイコンを「真理に仕える大司祭」(“*veritatis Pontifex*” / high priest of truth)、「自然の内奥までを解釈する者」(“*Naturae Aruspex intimus*” / most profound interpreter of Nature)と讃えている⁵⁾。ハーバートのラテン語の能力について、兄エドワードの証言がある。「弟のジョージはととても優れた学者で、ケンブリッジの大学代表弁士に任命されたほどだ。弟の英語の作品が一部現存しており、その類のものとしては希有なのだが、ギリシア語とラテン語で記した完璧な著作と較べると、舌足らずである。」⁶⁾

1625年のこと。そのときすでにハーバートはケンブリッジを去っており、しかもウォルトンが言うような数多くではなく、ほんの7編だけであったが、ベイコンは『詩

篇の英語の韻文による抄訳』(*The Translation of Certain Psalms into English Verse*)を公にし、ハーバートに献呈した。

To his very good friend

Mr. George Herbert

The pains that it pleased you to take about some of my writings I cannot forget; which did put me in mind to dedicate to you this poor exercise of my sickness. Besides, it being my manner for dedications, to choose those that I hold fit for argument, I thought that in respect of divinity and poesy met, (whereof the one is the matter, the other is the style of this little writing,) I could not make better choice. So, with signification of my love and acknowledgement, I ever rest

Your affectionate Friend, FR. St. ALBAN

(大切な友ジョージ・ハーバート氏に

私の著作のことで賜りましたご尽力は忘れられません。そのことが念頭から離れず、病を患っていたとき作りました小品をあなたに献呈します。さらに、扱うテーマに最も相応しいと思う方を選ぶのが、私の献呈の仕方であり、神学と詩歌が融合している点で[一方はこの小品の内容であり、もう一方は形式でありますから]あなた以上に相応しい人を選ぶことはできないと思います。それ故、私の愛と感謝の意を表明しつつ、いつまでも

あなたの腹心の友 セント・オルバン子爵 フランシス) 7)

ベイコンはハーバートの能力を高く評価し、『学問の進歩』(*The Advancement of Learning*, 1605)を増補改訂ラテン語版『学問の尊厳と進歩について』(*De dignitate et augmentis scientiarum*)にする際、翻訳の援助を依頼した⁸⁾。上記の献辞が世に出たとき、ベイコン64歳。ハーバート32歳。ベイコンはすでに収賄で有罪判決を受けゴランベリーに隠遁し、研究・著作に励んでいた。一方、ハーバートは定職に就けず独身で、後世有名となる詩集『聖堂』(*The Temple*, 1633)は死後出

版である。存命中に一部のラテン詩が公にされ、英詩に至っては手稿が知己の間で回覧されている程度であり、世間的には無名であった。ベイコンの献呈の辞が契機となり、ハーバートの宗教詩人としての名声が高まった。ベイコンは、ハーバートの発掘者であり、恩人である。

ちなみに、伝記作家のアイザック・ウォルトンは、ハーバートと同じ年に生まれた同時代人である。だが、ハーバートは1633年3月、40歳を目前に肺病で命を奪われるが、一方、ウォルトンは革命を経験し王政復古を見届け、1683年12月に90歳で永眠する。ハーバート伝には、国教会の高位聖職者と親交のあったウォルトンならではの愛と真実が窺える。

ところで、17世紀の古物愛好家で著名人のゴシップを集めたジョン・オーブリー(John Aubrey, 1626-1697)に、『名士小伝』(*Brief Lives*)がある。伝記の信憑性としてはウォルトンよりさらに低いのが、フランシス・ベイコンの生涯を描いた箇所にはハーバートの母親が登場する。オーブリーが話を聞いたサー・ジョン・ダンヴァーズとは同郷ウィルトシアの遠戚である。

... the Lord Chancellor Bacon. He came often to Sir John Danvers at Chelsey. . . I remember Sir John Danvers told me, that his Lordship much delighted in his curious pretty garden at Chelsey, and as he was walking there one time he fell downe in a dead sowne. My Lady Danvers rubbed his face, temples, etc., and gave him cordiall water; as soon as he came to himself, sayde he, *Madam, I am no good footman.*

(... 大法官ベイコン。彼はよくチェルシーはサー・ジョン・ダンヴァーズのところに来た。(中略)サー・ジョン・ダンヴァーズが私に語ってくれたことを思い出す。ベイコン卿はチェルシーの細部にこだわった洒落た庭をととも気に入っていた。あるとき、庭を散策していると、気が遠のき倒れた。ダンヴァーズ夫人が顔やこめかみなどをさすり、気付けに何かを飲ませた。我に返るとすぐ、「奥様、私は健脚の散策者／立派な従者ではありませんね」と気の利いたことを言われた。) 9)

卒倒したベイコンを介抱するダンヴァーズ夫人こそ、ハーバートの母親マグダレン・ハーバートである。サー・ジョン・ダンヴァーズとは再婚で、ハーバートにとっては継父にあたり、神学研究に書籍を買うため金銭面で援助を仰いだという。その継父ダンヴァーズは、若いころイタリアにいて、その国の庭園を学び英国に技法を持ち帰った。のちに革命が起こると、国王チャールズ一世の処刑に署名する弑逆者のひとりとなり、ハーバートを国教会の聖人として扱う王党派からは、詩人の瑕疵として意図的に看過される。

ダンヴァーズ夫人こと母親のマグダレン・ハーバートは文芸愛好者で、ジョン・ダンが彼女を敬愛・讃美するひとりで、夫人の埋葬に際して、葬送の説教を残している。また、1625年、国王ジェームズが崩御したあとロンドンでペストが猖獗を極めるとダンも、ダンヴァーズ家のチェルシーの屋敷に滞在する。そのときジョージ・ハーバートが一緒だったことが判っている¹⁰⁾。ベイコンは『随筆集』第3版 (*Essays*, 1625) で造園の技法を紹介するだけでなく、自らゴランベリーの地で見事な庭園を造り観想的な生活の一助とする。そのようなベイコン、ダンそしてハーバートの三人が一堂に会して様々に議論を展開したという記録こそ残っていないが、想像を逞くして、チェルシーのダンヴァーズ家で、珍しい庭園を散策しながら知の伝達のような雰囲気があった、と考えたい。

II アタランタの玉：学問と利得

ベイコンの『学問の進歩』はイギリス人にとっては国語で記された初の哲学書である。先に触れたように、後に広くヨーロッパに向けて『学問の尊厳と進歩について』（ラテン語版）へと増補改訂がなされるが、『大革新』の第1部の礎をなす作品である。その英語版『学問の進歩』は二部構成となっている。前編となる第1巻では、学問と知識の素晴らしさを、そしてそれらを増進し普及する功績と榮譽を述べ、後編の第2巻では、これまで学問の進歩のために考案された個々の行為や事業、またそれらのうちに見出される欠陥や不備について論じる。ベイコンは先を急がず、前編に入

るまえに学問が被った不信と汚名を雪ぐ。神学者、政治家そして学者自身に起因するものへと順に話を進め、特に、学者自身による不名誉としては、乏しい財産、彼らの習性そして研究の性質に由来するものを挙げる。さらに、研究の性質によるものとしては、研究そのものにおける過誤や虚栄と不健康な状態のふたつに分類される。前者は三つ、後者は十一に細分され吟味される。学者の不健康な状態で最後の11番目に取り上げられるが一番重要なのが、学問の目標や目的を見誤ることである。つまり、一部の学者が研究・学問を行なうのは、金儲けと生活の資を稼ぐためであって、神から授かった理性を人類の利益のために使うことが稀であるという。ベイコンが知識を金儲けに用いるなど力説するその理由は、学問が金儲けの手段になりすぎると、知識の進行を遅らせ探求を妨げるからだ。さらに説得の一助として比喩を用いる。

... like unto the golden ball thrown before Atalanta, which while she goeth aside and stoopeth to take up, the race is hindered. . .

(・・・アタランタの前に投げられた黄金の玉に似て、彼女が脇にそれて、腰をかがめそれを拾い上げる間に、競走が妨げられる・・・[第1巻5章11節])¹¹⁾

この直後に、ルネサンス期ヨーロッパ文学に甚大な影響を及ぼしたラテン詩人オウィディウス (Ovidius) の『変身物語』 (*Metamorphoses*) より、アタランタの競走で名場面といえる詩行が挿入され、学問研究をするうえで、目先の利益を優先し本来の目的を台無しにする愚かさが警告される。

ベイコンが『ノヴム・オルガヌム』 (*Novum organum*) を含む『大革新』 (未完) を発表したとき、「著者の声明」で学問と技術と人間の知識すべての全面的な革新を行なうという視座を示す。続いて「序言」では、学問の真の目的を規定する。つまり、学問を心の楽しみ、争いのため、他人を見下すため、利益や名声それに権力のため、あるいはその他このような低次元のためではなくて、人生の価値と効用のために追求することが大切である、と。(ベイコンが「効用」というとき、金儲けや生活の資を稼ぐことではない。) さらに「著作の区分」で、大革新全体の構想 (第1部から第6

部まで)とその概要が示される。その第3部「宇宙の現象、または哲学建設のための自然誌と実験誌」で、新しい仕方で作成される新しい種類の自然誌を規定する。彼が提供する自然誌は、内容の多様さで人心を喜ばせ、実験による即座の成果で役立つというより、むしろ原因の発見に光を当て、授乳過程の哲学にはじめて食べ物を与えるようなものであるとして、「アタランタの林檎」(pomum Atalantae / an Atalanta's apple)の比喩で裏打ちする。

だが、新たな仕事の担保のようなものを急いで捕えようとする、時を待てない子供じみたあの欲望を、競走を妨げるアタランタの林檎のように我々は徹底的に非として遠ざける¹²⁾。

壮大な計画のもと作られる自然誌は、即座に利益に結びつくとは限らず、その果実は収穫の時まで待たなくてはならない。青田を刈るように功を焦ってはならないと、ベイコンは警告する。実際、大革新の第3部はベイコンにより先鞭が付けられたが未完であり、ベイコン自身も言っているとおり、独りで行なう事業ではなく、多くの人を巻き込んで時間をかけて仕上げるべきものであった。

自然の解明を目指しその具体的な方途を示す大革新の第2部『ノヴム・オルガナム』は、アフォリズムの形式でまとめられる。その第1巻は、既存の学問・学説の論破である。従来の帰納法では自然の内奥まで入り込むことができず、しかも古いものに新しいものを付け加え、つまり継ぎ足しただけでは諸学の大きな進歩は期待できない。したがって、抜本的に学問を革新する必要があると説く。学問の革新のまえに除去すべき知性の幻影、四つのイドラを説明したあと、経験こそ、何ものにもましてすぐれた論証である。ただし、それがどこまでも実験である限りにおいてであるという。さらに、経験から学問や学説を導き出すときでさえ、せっかちにまだその時期ではないのに応用に向かうこと、しばしばである。なぜかという、人は常に利益と成果を上げたいか、その探求の仕事を早く終わらせたいか、あるいはまた自己宣伝によって評価されたいからである。ここでもまた、ベイコンは「アタランタ」の比喩 (more Atalantae / like Atalanta) を以て説得を強める。

その結果、アタランタのやり方で黄金の林檎を拾い上げるために走路を逸れて、その間に競走をすっかり中断し、掴みかけの勝利を両手から手放してしまうことになる。(第1巻70節)¹³⁾

ベイコンは革新の大仕事を構想し、実際に自身でその一部を手掛け、それなりの成果を示すものの、人類の幸福に向けた知の革新という大筋を忘れ、名声や利得という目先の瑣末で満足しがちな研究者の癖を、アタランタの神話に潜む寓意 (tanquam Atalantae pilas / as balls of Atalanta) を用い揶揄する。ベイコン自身もその危険性を十分認識しており、彼は学派を創立するという野心もなければ、また特定の成果を提供する約束もしないのである。その理由は、繰り返しになるが、

我々は、確かに、より大きな事柄を追求しており、このようなものすべてを早計で時期尚早であるとして非とする。あたかも(よく引き合いに出すように)アタランタの玉の如くに。なぜかという、我々は子供のように黄金の林檎を得ようと手を出すのではなく、自然と技術の競争に勝利するためにすべてを賭けるからであり、苔や青田を急いで求めるのではなく、機が熟すのを待つからである。(第1巻117節)¹⁴⁾

さらに、タイトルはラテン語だが、その内容は英語で記された『迷宮の糸、または探求の公式』(Filum Labyrinthi, sive formula inquisitionis)でも、よほどこの考え方に囚われていたのか、繰り返して用いる。

He thought also, that knowledge is almost generally sought either for delight and satisfaction, or for gain and profession, or for credit and ornament, and that every of these are as Atalanta's balls, which hinder the race of invention. (わたし[ベイコン]はまた次のように考えた。知識というのは、ほぼすべてにわたり、愉悦と満足、利得と生活の資、栄誉と装飾のために探求されるのであり、しかもこれらすべてがアタランタの玉のようなもので、発明の競走を妨げる、と。

これまで見てきたとおり、バイコンの主要な哲学的著作で、大筋を忘れて目先の利益を追求する愚かさが、アタランタの林檎および玉（ともに単数および複数の両用が見られるが）と観念連合となっている。

Ⅲ 神話の寓意的解釈：技術と自然

先に触れたように、『学問の進歩』（第2巻）は従来の学問を俯瞰するのがひとつの役割であり、詩（文学）の項目で寓意詩についての考え方が示されるので、一瞥しておく（第4章3-4節）¹⁶⁾。バイコンによると、寓意詩はある特別な意図や教訓を示す表現形式で、その英知はイソップ寓話などに見られるように、昔は影響力が大きかった。その理由は、俗人が理解できない理性の結論をその形式で表現する必要があったからである。しかしながら、論証の時代である当代でも寓意詩がもてはやされるのは、理性が未発達で、実例が適切に見つからないからである。寓意詩には、上述とは反対の意図を持った使い方があり。前者は教訓・下心に光を当て明らかにする働きであるが、後者は意味を隠す働きで、政治や宗教そして哲学の奥義を包含する。聖書だけでなく、異教の神話においても見られるという。ここでバイコンは、ギリシア神話から、巨人族の反乱を例にとり、隠れた寓意を白日の下に晒す。巨人族が神々と戦って負けたとき、彼らの母である大地がその復讐として妹ファマ（うわさ）を生んだ、という話。この神話の寓意は、国王が反乱を力づくで鎮めると、そのあと抑圧された民衆の間に陰湿なデマが出まわることを表すという¹⁷⁾。このように寓意的解釈がうまく成立する場合、はじめに神話が存在し、そのあと解釈が考案されるのであって、もともと意図や教訓があって次に神話を作られるのではないと考える。だが、バイコンは、この考え方が神話全体に当てはまるとも断言せず、『古代人の英知』でさらに論を展開することになる。

バイコンは『古代人の英知』に付した序文で、神話や寓話を読む意義を明確にする。

ホメロスやヘシオドスの時代に成立した神話群には、時代の変遷とともに人間の意識や精神に幕（ヴェール）が降ろされ、当代の読者が理解できない秘密の奥義が隠蔽されているという。だが、これらの秘儀を解釈するには、危険が伴うという。多少の器用さと知性の働きで、神話という素材に意味を差し挟み、悪用される可能性がある。実際、自身の学説を裏打ちするのに、都合よく寓話を捻じ曲げる試みが行なわれた。その恣意的な解釈の一例として、紀元前3世紀の哲学者クリシッポスを挙げる。彼は太古の詩人たちを夢解釈師にならない、ストア派に仕立てようとしたのだ。だが、一部の愚か者の行為で、神話全体の名誉を減じてはならず、ここに神話解釈の意義を留めるという。

神話群は、『学問の進歩』における考え方とは違い、もともと意味が先に考案された話が構成され、そのあと意図的に隠蔽されたと考える。一目ですぐに意味が読み取れるものと、物語を文字通り受け取るにはあまりにも馬鹿げていて、その裏に寓意が隠れているものがあるという。前者の如何にもありそうな神話は、歴史を模して楽しむために作られたと考えられるが、では後者の途方もない話は、どのように解釈したらよいのだろうか。一例として、パラス・アテネの誕生秘話を挙げる。最高神ジュピター（ユピテル）はメティスを（最初の）妻に迎え、彼女が身籠るとすぐにその身体を平らげてしまう。今度はジュピターのお腹が大きくなり、頭から武装したアテネが生まれたという話。これら荒唐無稽な話には、さらなる深遠な玄義が秘匿されているとしか考えられないという。しかしながら、バイコンは『古代人の英知』の序文ではジュピターとメティスの神話解釈を施さず、第30節「メティス、すなわち議会」で、その寓意を統治の秘密と解釈する。もともと、政治に関する言説をあまり公に開陳するバイコンではないが、『随筆集』第20節「忠告について」においても、ジュピターとメティスの話は国王が審議会を如何に利用すべきであるか、という統治の奥義を説いたものであるとの解釈を示している¹⁸⁾。常人の理解を超えた神話に関するバイコンの考え方を、私なりの言葉でまとめると、それらは古代詩人の創作というより、その前の時代から伝承された聖遺物で、人類すべてにあまねく天啓が示される訳ではないが、耳を澄ませて拝聴すべき天来の声となろう。この考え方自体は、ルネサンスにあまねく広まったもので、その意味では、バイコンも「時

代の子」(“a man of his time”)の域を出ていない¹⁹⁾。

さらに序文によると、古代において人間の理性によって発見された結論が当時としては新奇で、それを理解させる手段として類比や比喩の援助を求め、神秘のヴェールで覆い神話や寓話になった。それが意図的か偶然の産物かは定かではないが、そこに古代人の英知が見出されるという。したがって、意味や意図が不鮮明となった神話について、様々な詩人や作家に装飾のために付加された異物を排除し、物語の種々の版が共通に持つ深層真理を解明することが哲学者ベイコンの責務である。なぜなら『古代人の英知』の最終節「サイレンたち、すなわち快楽」の冒頭の比喩を借りると、古代人の英知は雑に絞った葡萄で、しぼり汁から並みのワインができるが、遺された糟に年代物の極上品が隠れているからである²⁰⁾。

しかしながら、学問は、確かめられた前提から出発しなければ、確実な知識に到達できないとし、「自然の秘密はそのまま放置するよりも、技術の拷問にかける方がいっそう正体を現す」(『ノウム・オルガヌム』第1巻98節)、と考えたベイコンは実験を重視した²¹⁾。つまり、科学的な証明や論証を推進したベイコンが、比喩の宝庫、類比的思考の牙城である古代の神話や伝承の中に寓意を探求したことに、パラドックスではあるが、彼の学問の興行きを見ることができる。それとともに、従来の研究で「古いものの偏重と新しいものの偏愛」を学問の不健康な状態のひとつと断罪するベイコンにとって、ここに彼の温故知新を見ることができる²²⁾。『古代人の英知』で取り上げられた31の神話に、アタランタの競走がある。

「アタランタ、すなわち利得」(“Atalanta, sive lucrum”)と題された第25節は、ふたつの段落から成る。神話のあらすじが示されたあと、寓意的解釈が施される。競走はこのように始まる。

アタランタは足の速さではだれにも引けを取らなかったが、勝利を目指してヒッポメネスと競走することになった。競走の条件はこうだ。ヒッポメネスが勝てばアタランタとの結婚を、負ければ死を。アタランタの勝利は疑いなしと思われた。というのも、彼女の競走における図抜けた卓越性は、多くの人々の死を以て明白であったからだ。したがってヒッポメネスは心を策略に向けた。し

かして彼は黄金の林檎を3個用意してそれを携えて行った。ことが始まった。アタランタが先行した。彼は背後から自分が取り残されているのを見て、策略を忘れず覚えており、黄金の林檎のうち1個をアタランタの視界の前に投げた。無論、まっすぐではなく斜めに、それも彼女を遅らせるだけではなく走路から逸らすために。彼女は女性特有の渴望により、また林檎の美しさに魅せられ、競走を中断し林檎の後を追いかけた。それを拾い上げるべく身をかがめた。その間、ヒッポメネスは走路をかなり進み、先頭に立った。しかし、彼女は天性の足の速さから、再び時間の損失を補い、再び跳び出た。だが、ヒッポメネスが2度3度と彼女を遅延させたので、ついに健脚ではなく策略によって勝者となった²³⁾。

話の骨子だけが示されるだけである。神話で慣例では、この競走の背後には如何なる神がいて、その神がどのような操作をしたのか、が挿入される。それが神話たる所以である。しかるに、ベイコンが扱うアタランタの競走では、神話的存在が中心で、神の存在が消失している。このことは、ベイコンがパリ滞在中(1576-1579年)に手に取って触れたと思われるモンテーニュ(Michel Montaigne, 1533-1592)の『エッセー』(Essays, 1580)と較べてみても、明白である。

すばらしい美貌と驚くほど敏捷な足をもった娘のアタランテは、言い寄ってくる多くの求婚者から逃れるために、もし競走で自分に匹敵する者があればその言うことを聞くが、負けた者は殺すという布令を出した。多くの男たちが、この褒美ならばこれほどの危険を冒す値打ちがあると考えてやってきたが、いずれも残酷な取引の犠牲となった。ヒッポメネスは皆のあとでやってみようとして、恋の守り神ウェヌスに祈りを捧げて御加護を願った。女神が願いを聞き届けて三つの金のりんごを与え、その用い方を教えた。いよいよ競走が始まった。ヒッポメネスは、恋人が自分の踵に迫って来そうになると、ついうっかりしたように、りんごを一つ落とした。娘はその美しさに気をとられて、脇にそられて拾わずにはいられなかった。(原二郎訳、第3巻4章「気をまぎらすことに

ついて」)²⁴⁾

モンテーニュの目的は、真に悲しむ貴夫人を慰めるにあたり、病根に斧を打ち込むのではなく気分転換をさせながら苦悩を忘れさせる、つまり話題の向きを変え縁の遠い話へ逸らし、知らず知らずのうちに苦悩の種を除去するという技法の紹介にある。そのモンテーニュでさえ、アタランタの神話で重要な役割を果たすウェヌス（アプロディテ）は欠かせない。また、ギリシア神話の原典ともいべきアポロドーロスの伝承では、競争相手がメラニオンであるなど枠組みに多少の異同は見られるが、アプロディテとともに、女神より授かる黄金の林檎が重要な小道具である。さらに、オウィディウスの『変身物語』でも、ウェヌスの援助を乞いその策略で勝利したヒッポメネスが女神の恩寵を忘れ、その祠で生贄をささげるのを忘れたが故にライオンに姿を変えられる話が、時に心理描写を交え微細に語られる。オウィディウスのあと紀元2世紀ごろ、ギリシア神話を網羅的に扱い神話の骨子を簡素にまとめたヒュギーヌスでさえ、アプロディテより授かった黄金の林檎とライオンへの変身が述べられる²⁵⁾。しかるに、バイコンにとっては、物語の背後に潜む寓意が重要であって、神話の中軸である愛の神アプロディテの件は省略される。この点が従来と一線を画すバイコンの神話解釈のはじまりである。

バイコンはアタランタの競走を次のように解釈する。

神話は、技術と自然との競争について、すぐれた寓意を提示していると思われる。というのは、アタランタによって表される技術は、もし何ら妨害し阻止するものがなければ、本来の力量によって、自然よりもはるかに俊足で、いわば韋駄天の如く先にゴールに達したはずだ。なぜなら、このことは、明らかに、ほぼすべての事柄に導き出されるからだ。ご承知のように、果実は種からだ時間がかかり、接ぎ木により早く実がなる。泥は自然のままだと石になるのは遅く、火で焼かれると早く煉瓦になる。人の精神においてでさえ、悲しみの忘却と慰安は、時の経過とともに自然の恩寵によってかき消されるが、しかるに哲学（それは、いわば生きる術であるが）を知れば、癒されるのに日は長くなく、

短縮される。しかし、黄金の林檎がその技術の特権と活力とを妨げ、人間界では無限の損害となる。諸学や諸術のうちどれひとつとして、その真のまっとうな進路をその終点まで、つまりゴールまで、常に前進したものは見られない。しかるに、諸術は始めたことを中断し走ることを止め、アタランタのように私利私欲を求めて脱線する：

彼女は走路をそれて、転がる黄金を拾い上げる。

したがって、技術が自然に勝てなくても、そして競争の協定と掟によって、敗者を殺してその命を奪えなくても不思議はない。それどころか、技術が自然に支配されるという反対のことが生じる。あたかも、妻が夫に隷属するかのよう²⁶⁾。

バイコンの考えでは、アタランタは公共の福祉に資する技術を擬人化したものであり、人類はその発展に邁進すべきであるが、残念ながら黄金の林檎で表される目先の利得に惑わされ、愚かにも崇高な目的を忘れ技術の革新が阻まれるという。バイコンが『ノウム・オルガムス』で表明するアフォリズムのひとつ「自然は服従することによってでなければ、征服されない」（第1巻3節）と、上記引用で最後の1節に表明される夫婦関係とを併せ考えると、意味深長である²⁷⁾。ある解釈によると、この寓意は錬金術師を批判したものであるという。たしかに、黄金という言葉の連想と目先の利益を追求する工夫と方法、そしてバイコン自身が『学問の進歩』（第1巻4章11節）で錬金術を空想的な学問と断罪していることから、説得力がある。しかしながら、バイコンは錬金術を糾弾する一方で、イソップ寓話を援用し、怪我の功名ともいべき功績を讃えている。ある農家が死に際、子供たちに黄金を葡萄園に埋めたと遺言する。財宝探しに息子たちは懸命に土地を掘り返す。結局遺産は見つからなかったが、翌年、葡萄が大豊作になったという。これと同じで、錬金術は黄金を作ろうとする研究と努力のお蔭で人間の生活にも自然の解明にも役立ち、実り豊かな発明や実験を生み出したと評価している²⁸⁾。また一説では、純粹（基礎）科学と応用科学との関係について、後者が限定された範囲内での新発明に満足するだけで、宇宙の神秘を追求しない近視眼的な物の見方を評したものであるという²⁹⁾。た

しかに、現代的な立場から振り返ってみれば、そのように捉えられるであろう。だが、いずれにしても、『古代人の英知』で示されるアタランタの神話解釈は、神話や神話的存在を題材にして寓意を探し求めたのはルネサンス的であっても、自然科学に関する考え方や自分の哲学を表明するのに寓意を媒体 (vehicle) として利用した点で、本人は恣意的な解釈の陋弊を承知しながら援用している節はあるが、ペイコン独自の視座といえる³⁰⁾。さらに、この寓意解釈は、イギリスでは旅行家として知られるジョージ・サンズ (George Sandys, 1578-1644) の『英訳オウィディウスの変身物語』(Ovid's *Metamorphoses Englished*, 1623) の注釈に増幅された形で組み込まれ、ペイコンの精神が受け継がれる³¹⁾。

ちなみに、引用の途中に詩が1行挿入されている。オウィディウスの『変身物語』第10巻667行目である。モンテーニュも当該箇所を引用しており、アタランタの競走で勝敗を分けるターニング・ポイントを表す詩行である。また、ペイコンの『古代人の英知』は、寓意的解釈を好むイタリア人に向けて伊訳が出るほどであった³²⁾。ポローニャの画家グイド・レーニ (Guido Reni, 1575-1642) は、まさにこの瞬間を題材とした。(「アタランタとヒッポメネス」マドリッド、プラド美術館、およびナポリ、カポディモンテ美術館蔵)

IV 創造主ではなく自然を愛でる愚

1630年4月、ハーバートは妻ジェーン・ダンヴァーズを連れて、ウィルトシアはソールズベリー近くの寒村ベマトンに教区牧師として赴任する³³⁾。その地での経験に基づき散文で記した作品が『田舎牧師』(*The Country Parson*, 1652) で、後に国教会では牧師の理想像と目される。その第30章「牧師の摂理についての考え」で、大地に根ざし額に汗して働く人々に、信仰の妨げとなる謬見を捨て去るように導く。ハーバートの見立てによると、田舎の人々は自分たちが大地に種を蒔き肥料を施せば穀物 (小麦) が収穫でき、また牛に飼料を与えれば牛乳と子牛が手に入るので、ある種の自然の成り行きと自分たちの努力によって世の中は回るとの思い込みがあ

り、それゆえ神に帰依する心が弱く、田舎牧師は彼らに森羅万象の背後に潜む摂理の重要性を説くべきだという。その方便として、神に具わる三つの力を説明する。その第一は維持する力であり、第二は統治する力、そして第三は霊的な力である。維持する力によって、神は存在する森羅万象を保持し活性化させる。穀物は神が必要に応じて与え続ける力によってのみ成長する。神による供給がなければ、泉が涸れると川が干上がってしまうように、穀物も即座に枯れてしまう。神は統治する力によって、事物同士の関連性を保持し調整する。穀物は成長するが、その成長の過程で神の維持する力によって保持されるのだが、神が統治する力で他の現象、例えば季節や天候などを穀物の成長に合致させなければ、豊作も無に帰してしまう。農夫が収穫のため手に鎌をかける準備ができ、もう安全に干し草を積み上げられると思うと、その瞬間に神は穀物をなぎ倒し、全滅させるような天候の異変をもたらすことがある。あるいは、農夫が穀物を納屋に収めるまでは神を待み、そのあと神を忘れすっかり安心であると考えたとする、すると神は火災をもたらし、持ち物すべてを焼き尽くすことがある。神がなぜこのようなことを行なうかといえ、それはたとえ運が味方しようとも、人間に神への依存を怠らず続けさせるためである。三番目の力は霊的なもので、それによって神は外面的な祝福をすべて内面的な福德に変える。だから、もし豊作で、農夫が十分に収穫をしたあと納屋に収め、そしてそこで安全に確保したとしても、それを利用し売りに出す恵みを神が与えなければ、農夫の利益すべては失われてしまう。霊的に進歩しないよりは、穀物が焼けて失われる方がまだ。そしてこの点において、神の善意が如何に人間の頑迷を矯正するかが見て取れるという。摂理の説明としては神の三つの力による方便で十分であると思われるが、田舎の人々を説得するのに、彼らが具体的な事柄で心動かされるのを承知して、寓話をを用いる。

Man would sit down at this world, Gods bids him sell it, and purchase a better:
Just as a Father, who hath in his hand an apple, and a piece of Gold under it;
the Child comes, and with pulling, gets the apple out of his Fathers hand: his
Father bids him throw it away, and he will give him the gold for it, which the

Child utterly refusing, eats it, and is troubled with wormes: So is the carnall and wilfull man with the worm of the grave in this world, and the worm of Conscience in the next.

(人間はこの世界に居座っているようなもので、神は人間にそれを売り払い、さらによいものを買取するように命じる。それはちょうど、父親が手に林檎を、その下に黄金を隠し持っているようなもので、子供が来て袖を引き父親の手から林檎を取ろうとするが、父親は林檎の代わりに黄金をやるからそれを捨て去れと言う。その申し出を子供はまったく顧みず、林檎を食べ、虫に悩まされる。それと同じで、現世的で頑迷な人間はこの世では墓場の蛆に、あの世では良心の蛆に悩まされる。) ³⁴⁾

親の心を知らぬ子供は、その時点での自分の欲望に支配され先の見通しが立たない。それで、隠れた黄金には目もくれず、目先の林檎に飛びつく。神話に登場するアタランタの場合、ゴールを忘れて輝く黄金の林檎を追いかけた。「黄金と林檎」か「黄金の林檎」という相違はあるが、ペイコンが好んで用いた大筋を忘れ目先の利益を追求するという寓意が、ハーバートの寓話に秘匿されているようだ。

ハーバートは「滑車」と題する詩で、ギリシア神話でも古い時代に属するパンドラのお話を援用し、神による人類創造を語る³⁵⁾。パンドラとは、ゼウスが人間に禍を与えようと、オリンパスの神々に命じて作らせた人類最初の女性である。パンドラは婚礼の祝に神々より授かった壺(あるいは甕や瓶、あるいは箱)を好奇心から開けると、悪意の災禍が飛び出し、それまでには存在しなかった不幸、病気、労働などが世に遍満する。慌てたパンドラが蓋を閉めると、「希望」だけが残ったという。ハーバートの詩で話者たる神は、人間に善意の贈り物をする。恵みのグラスを持った神は、そこから力、美、智慧、名誉そして快樂を注ぎ込む。様々な財宝ともいべきものを人間に与えたところで、「希望」ならぬ「安息」(“Rest”)がグラスの底に止まっているのに気づく。ところが、ハーバートの神はここまで来て逡巡する。はたして「安息」を人間に与えたものかと。なぜかという、人間に「安息」まで与えると、それに満足して、その贈り主たる神に感謝しなくなるのではないかと考え

たからだ。

For if I should (said he)

Bestow this jewell also on my creature,

He would adore my gifts instead of me,

And rest in Nature, not the God of Nature:

So both should losers be. (ll. 11-15)

(というも、私が[仰せられた]

この宝石を人間に与えてしまうことがあれば、

人間は私ではなく私の贈り物を崇拜し、

創造主の神ではなく、自然に安らぐであろう、

そうなれば、双方ともに敗者となる。) ³⁶⁾

安息という宝石に目を奪われ、神の慈愛を無視する人間の陋習を心配したのだ。創造主の神ではなく被造物の自然に想うのは、親心を知らぬ子供が黄金ではなく林檎に執着する愚行に似てはいないだろうか。ここでも、「黄金」と「宝石」という違いはあるが、競走関連の語「敗者」が使われ、「アタランタ」という語は完全に詩行に埋没しているが、その寓意は連想される。このことは、ダンの恋愛詩で「アタランタの玉」の箇所と較べてみると、アタランタの寓意が透かしの如く鮮明に映し出される。

ダンの「床に就く恋人に」は、彼が法学院のひとつリンカーズ・インに在籍し、放蕩の限りを尽くしていたころの作品であると推定されている。手本としたのは、オウィディウスの『恋の歌』(Amores)で、恋人コリンナの衣服を剥ぎ取り、裸体のここかしこを讚える「昼下がりの恋人」(第1巻第5節)である³⁷⁾。ダンの詩の冒頭は、手本と同様、身分の高い恋人に衣装を脱ぐように命じるころから始まり、様々なパーツが讚美される。ところが、ダンのそれは、エリザベス朝の恋愛詩によく見られるように、つまりペトラルカ風に世俗のエロスが天上の愛に昇華されるプラトンの愛をも、冷めた目で皮肉る。

... Gems which you women use
Are as Atlanta's balls, cast in mens views,
That when a fooles eye lighteth on a gem
His earthly soule may covet theirs not them. (ll. 35-38)

(・・・あなたがた女性が身に付ける宝飾は
男の目に入るように投げられたアトランタの玉に似ている、
宝飾のひとつに愚か者の目が止まると
世俗的な心が欲しがるのは、女性ではなく装飾品である。) ³⁸⁾

キーワードが「アタランタ」(Atalanta)ではなく「アトランタ」(Atlanta)という違いはある。韻律上の工夫という外形的な要因の他、神話でアトラスの七人の娘たちがヘスペリアの園で番をする黄金の林檎との連想が考えられる。ある伝承では、アプロディテがヒッポメネスに授けた黄金の林檎は、この園からもぎ取ったものとされる。また、黄金の林檎はオレンジだとする説もあり、たしかにその方がよく転がるであろうが、林檎をひろく果物を指すと解しておこう。それら瑣末は看過して、本筋からそれて目先の宝飾に心奪われる愚かさが揶揄される点、そして何よりも林檎ではなく「アトランタの玉」という語句が使われている点で、バイコンの神話解釈が連想されて然るべきであるが、ダンの研究者の間ではその指摘はない³⁹⁾。それはともかく、さらにダンは、アタランタの寓意だけでも十分説得力があると思われるが、書物の比喩で裏打ちする。「平信徒の気を惹くために添えられた挿絵や書物の豪華な装幀に似ている、すべての女性が着飾るのは。」(39-40行)ローマ・カトリック教会に対する批判も込められていようが、貴婦人の身に付けるきらびやかな装飾に目が眩み女神の如きご神体をおろそかにするのは、豪華版の聖書の飾り文字やイラストに気を取られ神の言葉をないがしろにする俗人の愚の骨頂である。ここに、恋愛詩のモチーフが宗教詩に転用され、さらに風刺される過程が見出される。〈女性の裸体とそれを覆う豪華な服飾〉と〈神意と派手な書物〉の構図が浮かび上がり、この構図は、ハーバートの宗教詩に見られる〈神と美しい自然〉の構図と同じである。ハーバートの「滑車」の一節「私ではなく私の贈り物を崇拜し、／創造主の神ではなく、

自然に安らぐ」は、ダンの「アトランタの玉」のメタファーがさらに深化して、キーワードが詩行に埋没し透かし模様となっている。

バイコンの『学問の進歩』によると、神学者による学問批判のひとつは、「知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す」(『伝道の書』1章18節)との聖句に代表されるように、学問の盛んな時代は無神論に傾き、第2原因の考察は第1原因である神への帰依を弱める、ということである⁴⁰⁾。この非難に対してバイコンは、神が自然のなかで第2原因によってのみその御業を行なうというのは確かであると認めたくえて、微少で浅薄な哲学の知識は人間の精神を無神論へと導くが、その道をさらに進めば精神は再び宗教に立ち返ることは真理であり、経験から得られた結論であると反駁する。というのも、哲学の入り口で人間精神は感覚に最も近い第2原因を思い浮かべるが、その敷居をまたいで先に進むと最高原因・神の摂理を会得できるからである。大切なのは、学問の量ではなく質であり、それを支える愛であるという。さらに、人間は神の言葉を記した書物(聖書)と神の御業を記した書物(自然)、すなわち神学と哲学に精通すべきである、と結ぶ⁴¹⁾。前述したように、バイコンはハーバートの同窓の先輩であり、『学問の進歩』をラテン語に翻訳するのを手伝ったハーバートであれば、バイコンが説く感覚に惑う人間が神ではなく自然を崇拜しそれに安らぐ危険性を承知し、宗教詩という形式でその真意を秘匿したと考えると、ダンの恋愛詩を踏み台とする、師から弟子への知の階梯が顕現する。

むすび

フランシス・バイコンは主要な著作で、観念連合となる「アタランタの玉」を援用する。そのときは必ず、目先の利益に惑わされ本筋を忘れる愚かさが暗示される。『古代人の英知』の神話解釈では、ルネサンスの伝統に従いながらも、つまり神話を寓意的に解釈すると見せかけて、神話や寓話という題材を実は己の思想や哲学を示す表現手段に利用した。ジョン・ダンにはバイコン由来の語句「アトランタの玉」を隠喩とし、女性の裸体ではなく脱ぎ捨てられた宝飾を追う愚かさとともに、神の言葉で

はなく豪華絢爛たる聖書に惑う愚かさを揶揄した。ジョージ・ハーバートはペイコンの寓意的解釈やダンの隠喩を巧みに詩行に埋没させ、神ではなく自然に安らぐ人間の悪癖を透かしの如く秘匿した。それはあたかも古代人が神話に秘密の奥義を隠蔽したのと同じやり方である。これまでの議論を踏まえたうえで、ハーバートの詩句「神ではなく神の贈り物を崇拜し、／創造主ではなく、自然に安らぐ」について言えば、ペイコンとダンの知的磁場のもと、ふたりの影響がないというより、あるという方がはるかに説明しやすいように私には思われる。

ひとつの結論として、それを私なりの比喩を使って表現することが許されるなら、ペイコンを頂点とし、そこから影響のベクトルがダンとハーバートに斜め下に向かい、それとともにダンからも触手がハーバートに伸びて、強力な磁場を持つ三角形が形成される。影響の多寡は未確定であり、でき上がった三角形が正三角形か二等辺三角形かは不明。しかしながら、その三角形は、それぞれの頂点を円周の内側に接する形でアタランタの玉に収斂される。アタランタの玉は、ルネサンスという宇宙の内側に接しながら回る周転円というより、新しい天文学で示された彗星の動きを見せる。

註

- 1) 山根正弘「ジョン・ダンとジョージ・ハーバート—Atlanta's ballsを追って—」英米文化学会編『英米文化』第26号(1996年3月) 17-25頁。
- 2) Douglas Bush, *Science and English Poetry* (New York: Oxford University Press, 1950), p. 38; Joseph H. Summers, *George Herbert: His Religion and Art* (1954; rpt. Binghamton, N. Y.: Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1981), pp. 97-99; 195-97; Arnold Stein, *George Herbert's Lyrics* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1968), pp. xxx-xxxviii; William Sessions, "Bacon and Herbert and an Image of Chalk," in Claude J. Summers and Ted-Larry Pebworth, eds., *"Too Rich to Clothe the Sunne": Essays on George Herbert* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1980), pp. 165-78; Charles Whitney, "Bacon and Herbert as Moderns," in Edmund Miller and Robert DiYanni, eds., *Like Season'd Timber: New Essays on George Herbert* (New York: Peter Lang, 1987), pp. 231-39; Angela Balla, "Baconian Investigation and Spiritual Standing in Herbert's *The Temple*," *George Herbert Journal* 34, nos. 1 and 2 (fall 2010/spring 2011): 55-77.

- 3) David Novarr, *The Making of Walton's Lives* (Ithaca: Cornell University Press, 1958), pp. 301-61, esp. pp. 347-48.
- 4) Izaak Walton, *The Lives of John Donne, Sir Henry Wotton, Richard Hooker, George Herbert and Robert Sanderson*, ed. George Saintsbury (London: Oxford University Press, 1927), p. 273.
- 5) F.E. Hutchinson, ed., *The Works of George Herbert* (1941; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1945), p. 436; John Tobin, ed., *George Herbert: The Complete English Poems* (London: Penguin, 1991), pp. 319-20; *The Latin Poetry of George Herbert: A Bilingual Edition*, trans. Mark McCloskey and Paul R. Murphy (Athens, Ohio: Ohio University Press, 1965), pp. 168-69; Nieves Mathews, *Francis Bacon: The History of a Character Assassination* (New Haven: Yale University Press, 1996), p. 313; John Drury, *Music at Midnight: The Life and Poetry of George Herbert* (London: Allen Lane, 2013), pp. 130-38.
- 6) *The Life of Lord Herbert of Cherbury*, ed. J. M. Shuttleworth (London: Oxford University Press, 1976), p. 8.
- 7) James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath, eds., *The Works of Francis Bacon*, 14 vols. (1857-74; rpt. Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Frommann Verlag, 1961-1963), VII, 275. 邦訳は試訳。
- 8) Hutchinson, *op. cit.*, pp. xxxix-xl. S.L. Bethell, *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century* (London: Dennis Dobson, 1951/1963), pp. 59-60; *Critical Heritage*, ed. C. A. Patrides (London: Routledge & Kegan Paul, 1983), p. 57; Amy M. Charles, *A Life of George Herbert* (Ithaca: Cornell University Press, 1977), p. 78; Cristina Malcolmson, *Heart-Work: George Herbert and the Protestant Ethic* (Stanford: Stanford University Press, 1999), pp. 49-50.
- 9) *Aubrey's Brief Lives*, ed. Oliver Lawson Dick (1949; rpt. Jaffrey, New Hampshire: David R. Godine, 1999), pp. 9-12. 邦訳は、橋口稔・小池銈訳『名士小伝』[抄訳] 富山房、1979年) 188-95頁を参照したが、訳文は一致していない。
- 10) Amy M. Charles, *op. cit.*, p. 64; R. C. Bald, *John Donne: A Life*, ed. Wesley Milgate (Oxford: Clarendon Press, 1970), p. 476; Drury, *op. cit.*, p. 24.
- 11) Spedding, *op. cit.*, III, 294. 『学問の進歩』および『ノウム・オルガスム』の邦訳は服部英次郎・多田英次・中橋一夫訳『ベーコン 学問の進歩、ノウム・オルガスム、ニュー・アトランチス』「世界の大思想」6 (河出書房新社、1969年) 36頁を参照した。訳文は一致していない。以下、和訳がある場合、原文の巻数と頁数 / 翻訳の頁数を併記する。
- 12) Spedding, *op. cit.*, I, 141; IV, 29 / 221頁。スペディング編『ペイコン著作集』(前掲) 第4巻に収録された『ノウム・オルガスム』(英訳)の当該箇所を原典と翻訳の間に入れて示す。
- 13) Spedding, *op. cit.*, I, 180; IV, 71 / 253頁。
- 14) Spedding, *op. cit.*, I, 213; IV, 105 / 284-85頁。
- 15) Spedding, *op. cit.*, III, 498. 邦訳は、『迷宮の糸』(抄訳) 坂本賢三編著『ベーコン』「人類の知的遺産」30 (講談社、1981年) 所収、312頁を参照したが、訳文は一致していない。
- 16) Spedding, *op. cit.*, III, 344-45 / 78-80頁。
- 17) 「ファマ」の神話解釈は、『古代人の英知』第9節「巨人族の妹、つまり噂」で取り上げられる。Spedding, *op. cit.*, VI, 645; VI, 718-19. さらに『随筆集』第15節「反乱と騒動について」、および

- 「噂について」の断片でも解説される。Spedding, *op. cit.*, VI, 407; VI, 519; 渡辺義雄訳『ベーコン随想集』(岩波文庫、1983年) 69頁、250頁。
- 18) Spedding, *op. cit.*, VI, 683; VI, 761-62; VI, 424; 渡辺義雄訳、前掲書、96-97頁。
- 19) Charles W. Lemmi, *The Classic Deities in Bacon: A Study in Mythological Symbolism* (1933; rpt. New York: Octagon Books, 1971), p. 45; 伊藤博明「フランシス・ベーコンと『古代人の知恵』」『科学史研究』第50巻(2011年) 18頁。Cf. Douglas Bush, *Mythology and the Renaissance Tradition in English Poetry* (1932; rpt. New York: Norton, 1963), pp. 251-55; Hardin Craig, *The Enchanted Glass* (1936; rpt. Westport, Conn.: Greenwood, 1975), p. 95; Rosemary Freeman, *English Emblem Books* (1948; rpt. New York: Octagon Books, 1978), p. 4; Rosemond Tuve, *Elizabethan and Metaphysical Imagery* (Chicago: University of Chicago Press, 1947), p. 161. なお、当時の寓喩については “. . . this manner of inversion extending to whole and large speeches, it maketh the figure *allegory* to be called a long and perpetual *metaphor*.” (*The Art of English Poesy by George Puttenham: A Critical Edition*, ed. Frank Whigham and Wayne A. Rebhorn [Ithaca: Cornell University Press, 2007], p. 271); 「寓喩とは、文章や弁論全体を通して用いられる隠喩以外の何ものでもない。(中略)アレゴリー、即ち巧みに意味を隠した表現に他ならない。」(トマス・ウィルソン『修辞学の技術』上利政彦、他訳 [九州大学出版会、2002年] 212頁) また、カッシーラーによると、「われわれは神話意識のこうした内容を、『象徴的』なものとして捉えるのがつねであるが、それはその背後にその内容によって間接に暗示されている隠れた別の意味がさがしとめられるからである。こうして神話は神秘となる。その真の意味と真の深みとは、神話とその固有の形象のうちであらわにするものうちではなくそれが蔽い隠しているものうちにこそあるのだ。神話意識は、暗号のようなものであり、それを解く鍵を持っているものだけに理解でき解読できるのである。(中略)神話解釈とは、理論的意味内容であれ道徳的意味内容であれ、神話が内に隠しているものを明るみに出そうとする試みなのである。中世哲学はこの解釈に次の三層の段階を区別した。すなわち寓意的意味、精神的意味、神秘的意味の三つである。」(木田元訳『シンボル形式の哲学 [二]』全4冊 [岩波文庫、1989-1997年] 91頁)
- 20) Spedding, *op. cit.*, VI, 684; VI, 762. Cf. Rhodri Lewis, “Francis Bacon, Allegory and the Uses of Myth,” *Review of English Studies*, 125 (2010): 375.
- 21) Spedding, *op. cit.*, I, 203; IV, 95 / 275頁。同様な考え方は、『学問の進歩』(第2巻1章6節)にもある。Spedding, *op. cit.*, III, 333 / 69-70頁。
- 22) Spedding, *op. cit.*, III, 290-91 / 32-33頁。
- 23) Spedding, *op. cit.*, VI, 667-68; VI, 743-44. 坂本賢三編著、前掲書には『古人の知恵』(抄訳)のタイトルで、序文も一部和訳されている。本文中のアタランタの項目も割愛されている。本稿に掲げた邦訳は試訳。
- 24) モンテーニュ『エッセー (五)』原二郎訳、全6冊(岩波文庫、1965-1967年/1986年) 85頁。
- 25) アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳(岩波文庫、1953/1987年) 143-44頁; オウィディウス『変身物語 (上)』中村善也訳、全2冊(岩波文庫、1981-84年) 95-106頁; ヒュギーヌス『ギリシア神話集』松田治・青山照男訳(講談社学術文庫、2005/2013年) 250-51頁。
- 26) Spedding, *op. cit.*, VI, 668; VI, 744.
- 27) Spedding, *op. cit.*, I, 157; IV, 47 / 231頁。
- 28) Charles W. Lemmi, *op. cit.*, pp. 106-07. Spedding, *op. cit.*, III, 289 / 31頁。「農夫と息子たち」中務哲郎訳『イソップ寓話集』(岩波文庫、1999年) 所収、53頁。
- 29) Benjamin Farrington, *Francis Bacon: Philosopher of Industrial Science* (1950; rpt. New York: Haskell House, 1973), pp. 79-80. (ベンジャミン・ファリントン『フランシス・ベーコン—産業科学の哲学者—』松川七郎・中村恒矩訳 [岩波書店、1968年] 104頁)
- 30) F.H. Anderson, *The Philosophy of Francis Bacon* (Chicago: University of Chicago Press, 1948), p. 56; Paolo Rossi, *Francis Bacon: From Magic to Science*, trans. Sacha Rabinovitch (London: Routledge and Kegan Paul, 1968), p. 75 (パオロ・ロッシ『魔術から科学へ』前田達郎訳 [1970年; みすず書房、1999年] 103頁); 伊藤博明、前掲論文、20頁; Farrington, *op. cit.*, p. 78. (ファリントン、前掲書、102頁)
- 31) George Sandys, trans., *Ovid's Metamorphoses Englished* (1632; rpt. New York: Garland, 1976), p. 365.
- 32) Nieves Mathews, *op. cit.*, p. 381; 坂本賢三編著、前掲書、232頁。
- 33) 山根正弘「ジョージ・ハーバートの結婚—ウォルトンの『ハーバート伝』と田舎牧師の妻—」創価大学英文学会編『英語英文学研究』第44号(1999年3月) 79-96頁を参照。
- 34) Hutchinson, *op. cit.*, p. 272. 邦訳は、村上達夫訳『神殿に向かう司祭 または、田舎牧師 その性格と聖なる生活の規範』(白石庵敬神会、1999年) 128頁を参照したが、訳文は一致していない。
- 35) 山根正弘「ジョージ・ハーバートとヘシオドス—働き蜂と怠け蜂—」創価大学英文学会編『英語英文学研究』第72号(2013年3月) 89-114頁を参照。
- 36) Hutchinson, *op. cit.*, p. 160. 詩の邦訳は、鬼塚敬一訳『ジョージ・ハーバート詩集』(南雲堂、1986年) 325頁を参照したが、訳文は一致していない。
- 37) 中山恒夫編訳『ローマ恋愛詩人集』(国文社、1985年) 所収、452-53頁。
- 38) Helen Gardner, ed., *The Elegies and the Songs and Sonnets of John Donne* (Oxford: Clarendon Press, 1965/1978), p. 15. 詩の邦訳は、湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』(名古屋大学出版会、1996) 210頁を参照したが、訳文は一致していない。
- 39) *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne*, volume two of the *Elegies*, ed. John R. Roberts and Diana Benet, et al. (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2000), pp. 666-737.
- 40) Spedding, *op. cit.*, III, 264-68 / 9-12頁。なお、聖書の引用は、『聖書 新共同訳』(日本聖書協会、1978年)による。ベーコンはまた、『随筆集』第16節「無神論について」で、人間の精神が散在した第2原因を眺めている間は、時にそれらに安らぎ (“rest”)、その先に進まないこともある、と繰り返して述べている。Spedding, *op. cit.*, VI, 413; 渡辺義雄訳、前掲書、78頁。
- 41) E.R. クルツィウス「自然という書物」(第16章第7節)『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一、他訳(みすず書房、1971/1985年) 所収、464-73頁参照。

[附記] 本稿の構想は、大倉正雄先生(拓殖大学教授/経済思想史)との対話から生まれた。また執筆に際して、多くの助言や示唆をいただいた。ここに記して謝意を表す。